

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.181

2008年6月

平野総長が訪米 カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)と全学間学術交流協定を締結



## 目次

### ●ニュース

平野総長が訪米 カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) と  
全学間学術交流協定を締結 3

名誉教授称号授与式・懇談会を開催 4

第2回日本・南アフリカ副学長フォーラムに山本理事が出席 5

平成20年春の叙勲・褒章受章者決まる 5

平成20年度新規採用職員研修を実施 6

第18回経営協議会、第8回総長選考会議を開催 6

### ●知の未来へ

追跡限界のその先へ ～ハイテク動物行動学の紹介～ 7

依田 憲 (大学院環境学研究科准教授)

### ●知の先端

渋滞はなぜ発生するか? — 渋滞形成の数理と実証実験 — 8

杉山 雄規 (大学院情報学研究科教授)

### ●キャンパスクローズアップ

保健学科校舎・大幸体育館 10

### ●部局ニュース

附属図書館が2008年春季特別展を開催 12

第5回ミュンスター大学・名古屋大学共同セミナーを開催 13

大幸地区でライフトピア講演会を開催 13

タイ国家経済社会開発庁高官研修を実施 14

環境フォーラム「若者よ、地球を歩け 15

～ヒマラヤ氷河が発信する明日へのメッセージ～」を開催

エネルギーシステム (中部電力) 寄附研究部門 (第4期) 創設記念式典 15

及び記念シンポジウムを開催

地球家族プログラムを実施 16

●新名誉教授のことば 16

### ●環境への取り組み

環境安全衛生業務を向上させるために全国の大学と情報交換する 19

— 大学等環境安全協議会 —

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成20年4月16日～5月15日 20

●イベントカレンダー 22

### ●ちょっと名大史

豊田佐吉翁肖像画 24

# 平野総長が訪米 カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) と 全学間学術交流協定を締結





平野総長は、4月21日(月)、アメリカ・カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)を訪問し、同校との全学間学術交流協定を締結しました。また、これに先立つ4月18日(金)、昨年秋に全学間学術交流協定を締結したシカゴ大学を訪問しました。

UCLAとは、早くから活発な研究交流、教員交流を行っており、1981年に教育学部と同校教育学部との間で部局間学術交流協定を締結しています。近年では、2006年1月にエコトピア科学研究所と同校カリフォルニアナノシステム研究所との間で、また、2007年3月に工学研究科と同校工学・応用科学部との間で、それぞれ部局間学術交流協定を締結しています。このたび、産学官連携推進本部が中心となって準備を進め、全学間学術交流協定締結の運びとなりました。

この協定には、一般的な学術交流の項目に加えて、両大学間の産学連携協働と知的財産の移転等を推進する条項が盛り込まれ、本学が推進している国際的な産学官連携の一層の推進に寄与するものと期待されます。

当日、本学からは、総長、宮田理事、野水 勉総長補佐、渡辺明彦産学官連携推進本部教授、伊藤勝基医学系研究科特任教授、粕谷英樹医学系研究科講師が、また、UCLAからは、ジーン・ブロック学長、国際交流、知的財産・

産学連携等の関係者が出席し、両学長が協定書に署名を行い、今後の交流・連携について、活発な協議を行いました。また、医学部関係者とも会談が行われ、医学分野においても交流を推進することが協議されました。

UCLAは、10校で構成されるカリフォルニア大学の一つで、学生は約36,000名、教員は約4,000名を数えます。2006年のNewsweek誌による世界大学ランキングで12位に位置づけられるなど、これまでも多くの分野で高い評価を受けています。

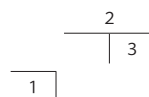
今後、本学と同校の間では、学生交流協定の締結も予定されています。これにより、両大学間の連携協力が全学的にさらに拡大し、発展していくものと期待されます。

一方、シカゴ大学との間では、本学名誉教授で2002年に同大学工学部教授に就任した山本尚教授の尽力によって、昨年10月に全学間学術交流協定および学生交流協定の締結に至りました。

今回の同大学訪問では、ロバート・ジマー学長以下、国際交流・学生交流、産学連携・知的財産移転、研究協力、医学分野の関係者と相次いで会談し、様々な分野において両大学間の学術交流を積極的に推進することが協議されました。



シカゴ大学は、資産家ロックフェラー家の資金提供により1890年に設立された私立大学で、設立当初から研究に重点が置かれ、2007年度Times誌ランキングで世界第7位に位置する世界トップクラスの大学で、80名を超えるノーベル賞受賞者を輩出しています。学生数は約15,000名、教員数は約2,200名、経済学分野では「シカゴ学派」の拠点です。両大学間の全学的な連携協力が発展することにより、より緊密な関係の構築の上で大きな意義をもつものと期待されます。



- 1 UCLAにて 協定書に署名後の握手  
(左から、ジーン・ブロック学長、平野総長)
- 2 UCLAにて 関係者集合写真
- 3 シカゴ大学にて  
(中央がロバート・ジマー学長)

# 名誉教授称号授与式・懇談会を開催

名誉教授称号授与式が、5月1日(木)、豊田講堂第一会議室において挙行されました。

名誉教授の称号は、本学教授として7年以上勤務し、教育上又は学術上特に功績のあった方に授与するもので、今回新たに33名(新制計978名)の先生方に授与されました。

授与式には、新名誉教授のうち19名が出席し、平野総長から一人ひとりに辞令書が授与され、永年にわたり本学の教育・研究の発展に多大なる貢献をしたことへのお礼とお祝いのことばが述べられた後、新名誉教授を代表して浪川幸彦先生からあいさつがありました。

引き続き、シンポジオンホールにおいて、名誉教授懇談会が、約110名の参加を得て開催されました。懇談会は、新名誉教授の紹介で始まり、昨秋及び今春の叙勲・褒章受章者、役員・部局長の紹介に続いて、総長からあいさつとこの1年の本学の動き等について報告がありました。その後、松尾 稔前総長の発声で乾杯が行われ、参加者は終始和やかな雰囲気の中で歓談しました。

今回、新たに名誉教授の称号が授与されたのは、次の方々です。



授与式の様子



集合写真

大学院工学研究科	田 邊 哲 朗	医学部保健学科	前 田 尚 利	大学院国際言語文化研究科	中 井 政 喜
大学院法学研究科	加賀山 茂	大学院医学系研究科	島 田 康 弘	大学院国際言語文化研究科	HIGH PETER BROWN
大学院工学研究科	土 井 正 男	大学院医学系研究科	吉 田 純	大学院環境学研究科	八 田 武 志
大学院文学研究科	山 田 弘 明	大学院工学研究科	坂 田 誠	大学院環境学研究科	林 上
大学院法学研究科	加 藤 久 和	大学院工学研究科	宮 田 隆 司	大学院環境学研究科	山 田 功 夫
大学院法学研究科	河 野 正 憲	大学院生命農学研究科	磯 部 稔	大学院情報科学研究科	廣 木 詔 三
大学院法学研究科	福 家 俊 朗	大学院生命農学研究科	島 田 清 司	大学院情報科学研究科	松 尾 進
大学院理学研究科	上 村 大 輔	大学院生命農学研究科	福 田 勝 洋	大学院情報科学研究科	横 澤 肇
医学部保健学科	伊 藤 秀 郎	大学院生命農学研究科	山 木 昭 平	環境医学研究所	妹 尾 久 雄
医学部保健学科	後 藤 節 子	大学院多元数理科学研究科	梅 村 浩	太陽地球環境研究所	小 川 忠 彦
医学部保健学科	田 伏 勝 義	大学院多元数理科学研究科	浪 川 幸 彦	太陽地球環境研究所	小 島 正 宜

(授与番号順、敬称略)

## 第2回日本・南アフリカ副学長フォーラムに山本理事が出席

山本理事は、4月28日(月)から30日(水)までの間、南アフリカ共和国ケープタウンを訪問し、第2回日本・南アフリカ副学長フォーラムに出席しました。同フォーラムは、両国の副学長や研究者が一堂に会して共同研究の推進等について意見交換し、大学間の協議に基づいた研究協働の促進を支援することを狙いとしています。第2回となった今



集合写真

回の焦点は科学技術分野の共同研究の協議で、日本から15機関32名、南アから26機関58名が参加しました。

28日には、マンゲナ南ア科学技術大臣及び古谷南ア日本国大使による基調講演、両国の高等教育についての講演、共同研究や共同事業の可能性とそのための資金調達と人材育成のためのセッションがありました。また、公式ディナーにおいて、山本理事が日本側代表としてあいさつを行いました。翌29日午前には、気候変動・エネルギー、健康・医学、ナノテクノロジー、数学・科学教育の平行セッションが、午後にはステレンボッシュ大学において、侵入生物学を含めた5件のショートレクチャーが行われました。最終日の30日には、フォーラムのまとめと覚書の署名、パンドール文部大臣の閉会あいさつがありました。

なお、本学理学研究科は南ア天文台と1998年に部局間学術交流協定を締結、本学が望遠鏡を設置し南半球の天体の赤外線観測を活発に行っており、日本の大学と南アの研究機関との学術共同研究が少ない中で、貴重な例と言えます。

## 平成20年春の叙勲・褒章受章者決まる

－本学関係者5名が喜びの受章－

平成20年春の叙勲及び褒章の受章者が発表され、本学関係者では次の方々を受章されました。

### 【叙勲】

[教育研究功労 関係]

瑞宝中綬章

鶴高 重三 名誉教授(農学部)  
元東京農業大学教授

瑞宝中綬章

江藤 恭二 名誉教授(教育学部)  
元教育学部附属中学校長  
元教育学部長  
元学生部長  
元愛知淑徳短期大学副学長・教授  
元愛知淑徳大学現代社会学部長・教授

[保健衛生・看護功労 関係]

瑞宝単光章

手塚 昶子 元医学部附属病院看護部看護師長

[文部行政事務功労 関係]

瑞宝双光章

牧 登 元附属図書館事務部長

### 【褒章】

紫綬褒章

磯部 稔 名誉教授(生命農学研究科)

## 平成20年度新規採用職員研修を実施



高橋事務局長の講義を聴講する受講生

平成20年度新規採用職員研修が、4月15日(火)から25日(金)までの9日間にわたり、野依記念学術交流館等において実施されました。この研修は、国立大学法人職員としての心構えを身に付けると共に、業務遂行にかかる基礎知識及び能力を養成することを目的に実施され、25名が受講しました。

はじめに、平野総長から、「企画マインド、経営マインドを持って日々の業務にあたってほしい」との期待を込めた講話があり、続いて、本学の組織・歴史、労働関係法、情報セキュリティ、健康管理、外部講師による接遇マナーの講義や、採用2年目の先輩との意見交換等が行われました。さらに、事務・図書職員は、各部署業務概要等紹介、企画力養成講義・実習、技術職員は、職場見学・実習を受講しました。24日、25日には、中津川研修センターにおいて宿泊研修が行われ、受講者は真剣にグループ討議及び発表に取り組んでいました。受講生全員が所定の課程を修了し、修了証書が授与されました。

## 第18回経営協議会、 第8回総長選考会議を開催



経営協議会の様子

第18回経営協議会が、5月11日(日)、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

会議では、平野総長のあいさつの後、本学の現状と課題として、高等教育政策の動向、国立大学法人制度の特徴、財務運営上の課題、本学の特徴とその課題等について、高橋理事から説明が行われました。

続いて、平成19年度実施大学機関別認証評価結果、学部・大学院の入学状況及び入学定員の充足率について、杉山理事から報告が行われました。

また、外部委員からは、法科大学院修了後の進路状況、附属学校の在り方等について、貴重な意見が多数寄せられました。

なお、同日には第8回総長選考会議も行われ、次期総長候補者の選考方法に関する事項について審議されました。

# 追跡限界のその先へ ～ハイテク動物行動学の紹介～

依田 憲 大学院環境学研究科准教授

子供の頃、近所にいる生き物を追いかけた経験はないでしょうか。アリのような馴染みのある生き物でも、ずっと追いかけることは意外に難しいものです。藪や巣の中にアリが入ったら、そこで人による追跡はやむなく終了。少し、してやられたという気分になります(なりませんか?)。いったいコイツ(アリのこと)は、見失った「その先」で何をやっているのか。

動物をどこまでも追跡したいという動物行動学者の執念は、工学センサを野生動物に接着する手法を生み出しました。この技術の利用は、追跡がもっとも難しいとされる海洋生物から始まりました。これまで陸上で観察するしかなかったアザラシやペンギンに水圧計を接着することで、例えばキタゾウアザラシが1000メートルもの深さまで潜る驚異的な潜水能力を持つことが明らかになりました。

現在ではさまざまなセンサを野生動物に装着することによって、動物たちの行動をあたかも目の前で見ていくかのように(時にはそれ以上に)再現することができるようになりました。例えば、動物にGPS機器を付けることによって、滞在位置や移動速度を秒単位で知ることができます。ま

た、加速度センサを装着すれば、走ったり、転んだりといった動物の動きそのものを連続的に再現することができます。行動だけではなく、胃内のpHを計測して消化速度を計ったり、心拍を計測して代謝量を計算したりもできます。さらに、ビデオカメラを野生動物に装着することによって、深海や上空の環境情報を撮影することも可能です。

このようにして得られた情報は、野生動物の行動理論の検証や、行動のメカニズムを解明するために使われています。また、とかく人間中心の視点で環境をみてしまいがちな我々ですが、近所の生き物が我々と同じ空間を利用している様子や、動物によって撮影された彼らの見る世界を観れば、環境を見る目も変わるかもしれません。このように様々な可能性を秘めた研究ですが、しかし根底にあるのは、「コイツはいったいどこで何をやっているのか」を知りたいという、単純な好奇心です。

研究業界も評価の嵐にさらされていますが、探求心本位の研究(Curiosity-based Research)を認める豊かな社会になってほしい、と思いながら、今日も世界中のフィールドを飛び回っています。



衛星発信機とGPSを頭部に装着した雌のキタゾウアザラシ



GPSデータロガーを装着したカツオドリ

# 渋滞はなぜ発生するか？ — 渋滞形成の数理と実証実験 —

杉山 雄規 大学院情報学研究科教授

「なぜ渋滞は発生するのか？」この素朴な疑問に「物理学による解答が与えられた。」と、今年3月に世界中のメディアが報じました。

高速道路の定点観測における車両密度と流量には、特徴的な関係が知られています(図1)。密度が小さい領域では、密度の増加に伴い流量が増加します(車の速度が一定でスムーズに流れる状態)が、ある密度以上では流量は減少し複雑な広がりを示し、この領域で渋滞が発生していると理解されます。

このように交通流は、ある臨界的な密度を境に際立って異なる2種類の挙動を示します。また、発生した渋滞は車の進行方向と逆向きにほぼ一定の速度(約20km)で伝播することが観測されています。このような性質を持つ渋滞現象が、自己

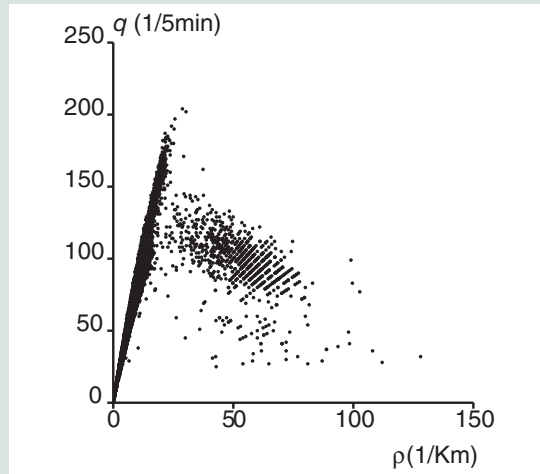


図1 高速道路交通流の車両密度 $\rho$ (道路上単位長さ当たりの台数)と流量 $q$ (単位時間当たりの通過台数)の関係(縦軸:流量、横軸:車両密度)。走行車線と追い越し車線、両方のデータを重ねてプロット。観測地点は東名高速道路172kp地点で、1996年1月の一ヶ月分の集積データ。臨界密度は25台/km程度でほぼ一定。

組織化現象として物理的観点から説明されるようになったのは、ごく最近(1990年代半ば)のことです。

車の運転において、自分の前方を走る車の動きは常に注意しますが、後方はときどきしか見ません。そして、お互い衝突しないように自分の車を加速したり減速したりします。交通流とは、このように互いに運動を調整制御しながら走る個体の集団(多体相互作用系)です。この世界は物質であれ社会であれ、必ず何かの集団で作られています。物質は原子や分子の集団であり、社会は人間の集団です。そして、それらは何らかの相互作用を持って運動し変化しています。水は0℃で自然に氷という固体になり、強磁性体金属はある臨界温度以下で自然に磁石になります。これらの現象は相転移現象と呼ばれ、集団であることの効果により起こる一般的な現象です。車と水分子・金属分子との重要な違いは、「前方は見るが、後方は見ない」という相互作用の非対称性です。この性質により、車の台数がある臨界密度を越えただけで、他に何らの原因がなくても、系全体のスムーズな流れが「不安定」になり、渋滞という形体が自然に発生することにより系全体が「安定」になることを、数理的に示しました。これを、「非平衡散逸系の動的相転移現象」と呼んでいます。

この物理理論の現実的正当性を、本物の車の走行によって示す実験を行いました。円周サーキットにより何処にも偏りがなく一様な状況の走路を設定し、ただ単に1列に並んで衝突の危険がない程度の一定速度と間隔を維持して走るだけの実験です。ところが、円周の長さ230mで車の台数が22台の場合は、平均密度が臨界値を僅かに超えており、理論的にはこのような自由走行は系全体の





図2 渋滞形成実験。円周230m、22台による円周サーキット上の走行による自然渋滞の発生。  
動画は IOP (Institute of Physics) のオンラインジャーナル ([http://www.iop.org/News/news\\_28849.html](http://www.iop.org/News/news_28849.html)) から、また YouTube ([http://jp.youtube.com/watch?v=7wm-pZp\\_mi0](http://jp.youtube.com/watch?v=7wm-pZp_mi0)) でも見ることができます。

集団運動の効果により安定性を保てない筈です。果たして、実験開始後しばらくは自由走行が維持されますが、車の運動の揺らぎが徐々に増幅し、ついにはこの状態を維持することが困難になり、連なった数台の車が完全に停止する状況が発生、クラスタが形成されたのです (図2)。クラスタの先頭車は発進できるが、最後尾に新たな車が到着し静止してしまふ。この継続的な車の出入りの運動 (図3) により、クラスタの大きさが維持され、車の進行と逆向きに一定の速度 (約20km/h) で「孤立波」のように伝播していく状態が安定に保たれます (図4)。これは理論上予測された通りの結果で、渋滞の形成です。

相互作用の非対称性は、外力やポテンシャル力とは違い、作用反作用の法則を満たしません。物質科学の世界ではほとんど例を見ませんが、人間

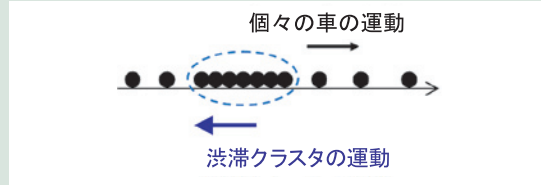


図3 個々の車の運動と渋滞クラスタの運動。車の出入りの運動により、クラスタの安定性が動的に維持される。ある種の“代謝”といえる。

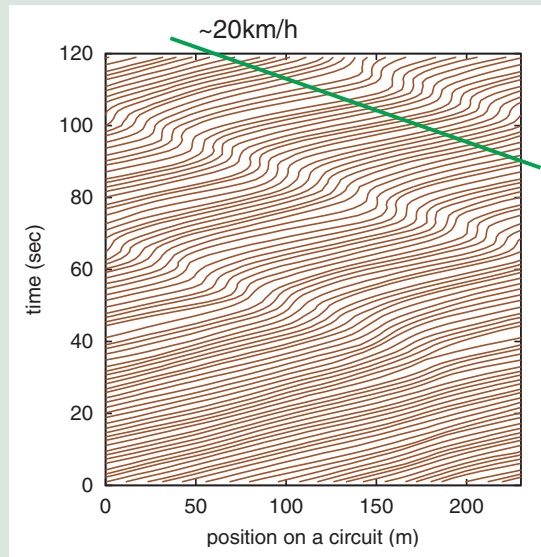


図4 円周サーキット上の各車両の時空間軌跡。渋滞クラスタの発生と運動。渋滞クラスタは孤立波のように後方に伝播する。速度20km/hは高速道路で観測された値と同じである。散逸系の孤立波なので、保存系のソリトンとは異なる。

や生物・生体分子が関与する世界では普通に存在し、その結果、広い意味での“渋滞”と同様の現象が、群衆の流れ、微小管上の分子モーターの運動、生物の集団運動・群れの形成など、様々な所で現れています。

山口県出身。1984年名古屋大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程後期課程修了、理学博士。1987年名古屋大学理学部助手、1990年三重短期大学助教授、1995年同教授を経て、2004年より名古屋大学大学院情報科学研究科教授。その間、1994年にベルン大学理論物理学研究所 (スイス) にて客員研究員。元々の専門は素粒子論だが、場の理論、くりこみ群、統計力学的手法により広く多体系の物理学を研究している。携帯電話と車の運転免許は持っていない。趣味はスキー、山登り、美術、料理など。

すぎやま ゆうき



## 23. 保健学科校舎・大幸体育館



### 保健学科校舎

医学部保健学科は、医療技術の理論と実践を科学的に追及する医療技術科学を学問領域として確立させ、その科学、技術学及び実践技術を研究・教授し、幅広い基礎と高度な専門知識及び問題解決能力、感性ある人間性豊かな資質を備えた医療技術者、教育者及び研究者を育成することを目的として平成9年10月に設置されました。

保健学科校舎は、昭和13年に三菱重工業社屋（事務所）として建てられた保健学科本館、昭和54年に医学部附属病院分院として建てられた保健学科南館、昭和60年に医療技術短期大学部校舎として建てられた保健学科別館の3つの建物があり、保健学科別館以外の建物は、学校として建てられていないため、校舎としての使い勝手が悪いものでした。なかでも保健学科本館は、名古屋大学の建物の中では築後68年と最も古く、戦災及び経年劣化が著しく、実験機器等の更新に支障を来していました。

そこで、施設の狭隘さと特殊施設の改善を含め保健学科本館の建替え計画が立案され、そのⅡ期目として平成20年3月に完成しました。

本施設は、大幸キャンパスのほぼ中央に位置するため、キャンパス内の他施設からのアクセスが最も良くなるよう隣接する東館及び南館と渡り廊下で接続しました。また、既存の保健学科本館南棟とほぼ重なるため、建物の建設にあたり、解体・撤去の部分が最低限になるよう設計を行いました。

平面計画では、基本的に1～2階の低層階に事務室、会議室の管理部門及び講義室を集約して配置し、3～5階に実験室、実習室、研究室を配置しました。特に大空間を必要とする実習室は最上階に配置し、建物全体として構造上無理のない計画としました。

本施設は、建築物としての長寿命化を実現するためさまざまな工夫をしています。外壁以外はコンクリート製の間仕切りを極力減らし、軽量鉄骨



下地とボード張りにすることで、将来模様替えする際、間仕切り変更が自由出来るようにしました。

また、コンクリートのひび割れを抑制し、劣化を遅くする目的で、打設するコンクリート中の単位水量を厳しく管理しました。

さらに、建物外周の各階に設備用バルコニーを設置し、ドラフトチャンバー用排気ダクトや空調機の屋外機、配管類を設置することで、将来更新・改修する際、上下階の部屋に影響することなく行なえるようにしました。

省エネ対策としては、外周に設けられた設備用バルコニーにより、夏の日射しを遮るとともに熱負荷軽減を図るため、窓には複層ガラスを採用し、建物内部全般に断熱材を施したほか、遮熱シート防水、屋上緑化を行う等、輻射熱の抑制による空調ランニングコストの低減を図っています。

## 大幸体育館

大幸体育館は昭和41年に建設され、耐震診断の結果、耐震性に劣る建物であることが判明していました。さらに老朽化が著しく危険なため、使用禁止となっていました。そこで、名古屋大学学術憲章に掲げる「研究と教育の基本目標」に従い、教育研究環境改善と耐震補強を実施し、安全性の確保と利用の活性化を図りました。また、東海地震に備えた地震防災対策強化地域に指定されたことにより、発災時の災害対応拠点として学内の帰宅困難者や学外の避難施設としても活用されることとなります。

今回の耐震補強方法は、工事費の抑制を考慮した上で、屋根面に水平ブレースを新設し、屋根面に作用する水平荷重を側のフレームに伝達できるようにし、屋外に鋼製のバットレスを設ける方法としました。

(施設管理部)



1	
2	4
3	5

- 1 保健学科校舎外観・北東面
  - 2 4階母子看護実習室
  - 3 5階基礎看護実習室
  - 4 体育館外観・北西面
  - 5 体育館内観
- (左：改修前、右：改修後)



## 附属図書館が2008年春季特別展を開催

●附属図書館

附属図書館及び同館研究開発室は、4月14日(月)から5月2日(金)まで、2008年春季特別展「濃尾の医術—尾張藩奥医師 野間家文書を中心に—」を開催しました。

附属図書館所蔵「野間家文書」は、尾張藩の奥医師であった野間林庵家代々の残した古文書で、今回が初公開となるものです。この資料により、江戸時代の尾張藩に仕えた一医家の活動状況がうかがえるだけでなく、我が国の先駆的な植物学者、博物学者で、本学附属図書館も関係資料を有する伊藤圭介を輩出したような濃尾地域の知の土壌を知る上でも、重要な手がかりとなることが判明しました。今回の展示では、圭介の父、西山玄道は野間家の門人であり、圭介の母、たきは野間家一族の出身で、実兄の大河内存真も野間家と行動をとともにしている事実などを紹介しました。伊藤圭介の関係資料展示については、名古屋市東山植物園の協力を得ました。

このほか、展示では、「高木家文書」や「大塩家文書」など、「野間家文書」以外の同館所蔵資料も活用しながら、濃尾という地域的な広がりの中で、江戸時代の人々が医学的なものにどのような関心の持ち方をしていたのか、また、その情報をどのように記録、伝達しようとしていたのかを、同館医学部分館の協力も得て、理解しやすいかたちで史資料の展示と解説を行いました。

4月19日(土)には、同館多目的室において、酒井シヅ順天堂大学医学部客員教授による講演「濃尾の名医たち」、斎藤夏来附属図書館研究開発室特任准教授による展示解説、西島太郎同室前研究員による補足説明が行われ、75名の参加者がありました。酒井氏の講演では、冒頭、今回の特別展にあわせて発行された図録について、研究書としても価値があると高く評価され、ついで、全国的にみても水準が高い江戸末期から明治初期にかけての尾張の本草学を牽引したのはどのような人々だったのか、野間家とも接触があった尾張の医学館主浅井家、シーボルトも驚くような学識を示した水谷豊文、伊藤圭介、彼らと連動していた美濃の本草家・医師の活動が紹介されました。さらに、濃尾の名医たちに連なる藤浪鑑の腫瘍の研究なども、世界的な業績として忘れられてはならないと指摘されました。

本展示には、学生、教職員、一般市民など、あわせて421名の来場がありました。この地域がかつて、医術および本草学の分野できわめて高い水準にあったことを再認識し、その知の土壌について新たな発見を交えた、有意義な特別展となりました。



展示会場の様子



講演会会場の様子



講演する酒井シヅ教授

## 第5回ミュンスター大学・名古屋大学共同セミナーを開催

●大学院理学研究科、物質科学国際研究センター

日独共同大学院プログラムの第5回ミュンスター大学・名古屋大学共同セミナーが、5月1日(木)、2日(金)の両日、ドイツのミュンスター大学において開催されました。同セミナーには、本学から教員6名、学生4名が発表者として参加し、ミュンスター大学側から教員5名、学生4名が参加しました。セミナー開始前には、本学の研究室に派遣されていたドイツ人学生とその担当教員が再会し、研究の進捗状況等を確認し合ったり、派遣がすでに決まっている日本人学生が、相手先研究室のドイツ人受入教員にあいさつしたりするなど、プログラムが順調に進行している様

子が伺われました。

当日は休日であったにもかかわらず、セミナー会場には学生があふれ、ドイツ側コーディネーターであるゲラルド・アーカー教授の開会あいさつに引き続き、日本側コーディネーターである異物質科学国際研究センター長が講演を行いました。講演の間には、現在ミュンスターに滞在している日本人学生も含め、ドイツ側の国際共同大学院に所属する学生達の研究を発表するポスターセッションも行われました。両日も、双方の研究に関する活発な質疑応答が続き、大成功のうちに終了しました。



講演する異教授



セミナー会場

前年度までの開催時期と代わり、今年度は5月、新緑の美しいミュンスターでの開催となり、午後9時を過ぎても戸外が明るい事に、初めて海外発表を体験する学生達は驚き半分嬉しさ半分で、ミュンスター大学の学生達に誘われ歴史あるミュンスターの町を案内され交流を深めたのち、10月の名古屋での再会を約束し合っていました。

## 大幸地区でライフトピア講演会を開催

●医学部

医学部は、4月27日(日)、保健学科東館において、ライフトピア講演会「年を重ねるといふこと～その豊かさ、その幸せ～ 第二回」を開催しました。

医学部大幸地区では、超高齢社会のための学際研究・教育拠点「ライフトピア」構想のもと、平成18年度より市民公開講座を開講しています。この構想では、健康を、病院

の中だけのことでなく広く生活の中のこととしてとらえ、医工連携や産学官民連携により、新しい保健医療生活モデルが構築できるように種々の活動に取り組んでいます。

今回の講演会には125名の一般市民の方々が参加し、井上隆敬あいち健康長寿産業クラスター推進協議会クラスターアドバイザーが、健康機器・技術開発で進められる産学連携事例を紹介した後、幸せな老いの条件として健康や家族、経済、生きがいがあることなどについて論じました。また大西丈二医学部老年情報学(中部電力)寄附講座准教授は、社会の急速な高齢化に対応するため老年学の発展が求められており、新しい技術を現実課題に応じ速やかに実用化する体制づくりに市民の協力が不可欠であると呼びかけました。

今後、今年度中には、「出逢いとまちのつばやきホットカレッジ ―まちの中の居場所―」(6月22日から全2回)、「高齢期の生活習慣病」(6月29日から全3回)、「尿失禁を知ってはつらつ人生」(8月2日)などの市民公開講座・シンポジウムが開催される予定です。



ライフトピア講演会の様子

# タイ国家経済社会開発庁高官研修を実施

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、4月7日(月)から10日(木)の4日間、タイ国家経済社会開発庁(NESDB)高官研修を実施しました。NESDBはタイ首相府直轄の政府機関であり、国家開発計画の策定を主務としています。このたび、第10次国家経済社会開発計画(2007-2011)の施行施策立案がチュラロンコン大学経済学研究科に委託されたことから、同大学と大学間学術交流協定を結んでいる本学の大学院国際開発研究科あてに政策研修の実施依頼があったものです。同研究科は、同大学との間で、教員の相互交流、大学院生の海外実地研修等の交流実績が厚く、また、開発途上諸国向けの政策対話において豊富な経験を有する教員が数多く在籍します。NESDBからは副長官、各局長をはじめとするトップ官僚9名が参加し、研修は、「人口減少・高齢化の中での経済社会開発」、「開発と環境共生」に国家開発の中でどう取り組むべきかについて、世界の政策潮流、日本の国家政策、日本の地域自治体の取り組みを学び、タイ王国での政策立案実施に資することを目的として企画されました。



名古屋市南陽ゴミ処理工場視察



大学院国際開発研究科におけるセミナー・政策協議の様子

研修プログラムは、大坪 滋同研究科教授が中心となり、愛知県知事政策局、名古屋市環境局、愛知県田原市役所、長野県清内路村、岐阜県馬籠観光協会等の協力を得て企画・実施され、最初の2日間は、同研究科において講義セミナーが開催されました。二村同研究科長のウェルカムスピーチの後、大坪教授による「人口減少・高齢化と経済社会開発」、木村宏恒教授による「日本の地方分権と地域開発」、西川芳昭教授による「地場リソースを活用した持続的な開発」、藤川清史教授による「日本の社会保障改革」「CDMと我が国の国際環境協力」、藤田昇義愛知県知事政策局主幹による「少子高齢化および環境共生に関する愛知県の取り組み」等のプレゼンテーションがあり、各テーマについて、それぞれ活発な政策協議を行いました。その後、後半の2日間は、現地視察として名古屋市南陽ゴミ処理工場、愛知県田原市(電照菊農家と社会資本)、長野県清内路村(限界村での村おこし)、岐阜県馬籠宿(観光開発と高齢者雇用)を訪れ、各地の政策担当者・居住者との協議を行いました。

研修団長を務めたスワニー・カメーン NESDB シニア・アドバイザーは、研修終了後、「タイが今後直面する国家開発の難問に関し、事前に多彩多様な視点、論点、政策オプションに触れ、地域レベルでのいくつかの対策実施現場を見分できたことは大変有用であった。心より感謝申し上げたい。名古屋大学の教員リソース、日本のケース・知見から今後とも必要な示唆を頂きたい。」と述べて名古屋を後にしました。

また、同研修には、関連政策を研究題材とする同研究科博士課程後期課程学生を中心に10名が研修補助として参加し、現実の政策セミナー・政策対話に直に触れる機会を得ることが出来ました。

# 環境フォーラム「若者よ、地球を歩け ～ヒマラヤ氷河が発信する明日へのメッセージ～」を開催

●大学院環境学研究所

大学院環境学研究所は、環境フォーラム「若者よ、地球を歩け～ヒマラヤ氷河が発信する明日へのメッセージ～」を、4月20日(日)、豊田講堂において、朝日新聞社との共催、文部科学省及び環境省の後援により開催しました。

同フォーラムは、本学と朝日新聞社が2007年秋に合同で行ったヒマラヤ氷河の調査について紹介し、地球温暖化への対応や地球環境改善を考える機会をつくることを目的として行われたもので、約1,000名の参加がありました。

第1部では、山本理事のあいさつ、エルンスト・フォン・ヴァイツゼッカー カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授

のビデオメッセージ、林環境学研究所長の趣旨説明に続き、氷河調査の中心を担う藤田耕史環境学研究所准教授が「今、ヒマラヤで起きていること」と題した基調講演を行いました。ヒマラヤ氷河の研究は、旧水圏科学研究所が1970年代から行っており、航空写真を研究初期と最新とで比較して見る氷河の衰退や、氷河融解による氷河湖決壊がもたらす大規模洪水災害の危機問題などが紹介されました。

第2部では、「地球を歩こう」と題したパネルディスカッションが催され、登山家の田部井淳子氏、上田 豊本学名誉教授、木村昌樹コミュニティ・ユース・バンク momo 代表理事がパネリストとして出席し、やせ細る氷河に危機感を述べつつ、「長期的な視野の必要な環境問題こそ若者の問題だ」、「地球を歩いて、自分が何をなすべきか、自分の体で考えて欲しい」と提言しました。

また、会場では、ヒマラヤ氷河の写真展があわせて開催され、参加者の関心を引いていました。



藤田准教授による基調講演



パネルディスカッション 会場の様子

# エネルギーシステム(中部電力) 寄附研究部門(第4期) 創設記念式典 及び記念シンポジウムを開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所は、4月17日(木)、環境総合館レクチャーホールにおいて、エネルギーシステム(中部電力)寄附研究部門(第4期)創設記念式典及び創設記念シンポジウムを開催しました。

同寄附研究部門(第4期)は、「持続的発展社会に向けた電気エネルギーシステムの革新」をテーマに掲げて創設

されたもので、創設記念式典には、田中孝明中部電力株式会社取締役専務執行役員技術開発本部長、大峯理事、松井エコトピア科学研究所長、北川邦行同副所長、関係部局長・評議員等関係者が出席しました。北川副所長の開会の辞、松井所長の式辞、大峯理事のあいさつがあった後、大峯理事から田中取締役へ感謝状及び記念品の贈呈があり、田中取締役より祝辞が述べられました。

引き続き、創設記念シンポジウムが開催され、第1部では、遠藤奎将教授、早川直樹教授から同部門第3期の研究活動の報告があり、その後、遠藤教授から第4期の活動方針の説明がありました。

また、第2部では、大久保仁工学研究科教授、武藤陽一中部電力株式会社技術開発本部電力技術研究所長、松村年郎工学研究科教授、藤波秀雄財団法人電力中央研究所電力技術研究所長、鈴置保雄工学研究科教授が、それぞれ講演を行い、聴衆は熱心に聞き入っていました。同シンポジウムには約150人が参加し、盛況のうちに幕を閉じました。



シンポジウムの様子

## 地球家族プログラムを実施

●留学生相談室

留学生相談室は、5月3日(土)から5日(月)の3日間、今年度初回となる地球家族プログラムを実施しました。

地球家族プログラムとは、1998年秋から実施されている週末などを利用した留学生のホームステイプログラムで、今回は42名の留学生が参加しました。本学では現在、約1,200名の留学生が学んでおり、同プログラムは、この環境を活用し大学および地域における国際理解を深めることを目的として始まったものです。

実施に先立って、4月23日(水)、オリエンテーションを開催し、過去の同プログラムの写真を見て、注意事項を確認し、最後に「楽しいホームステイ」というテーマでグルー



オリエンテーション



ホームステイ初日の参加者

プ討議を行いました。

5月3日、留学生センターラウンジでの対面からホームステイは始まり、自分のホストファミリーが見つかると笑顔で歩み寄り、ジェスチャーを交えて話している姿や、早速ホストファミリーの子供と遊んでいる姿が、あちらこちらで見られました。

終了後、留学生からは、「日本の家族生活の温かさを体験しました。このような機会がもっと多くなったら良いと思います。」等の感想文が寄せられています。このプログラムに参加することで、留学生は、日本に対する理解を深め、留学前に持っていた日本のイメージを新たにしている

ようでした。また、何かの折に遊びに行ける日本の家族がいるということは、留学生の心の安定に良い影響があるようです。困ったときに、ホストファミリーが助けてくれたという心温まるエピソードも伝わってきています。

次回の同プログラムは11月を予定しています。

## 新名誉教授のことば

(原文のまま掲載しています)



### 名古屋大学の法整備支援事業にかかわって

加賀山 茂 大学院法学研究科教授

1996年4月から2005年3月まで、私が名古屋大学法学部および法学研究科に在籍した期間は8年間であったが、1982年に国民生活センターに在籍していた頃から本学の非常勤講師として消費者保護法の講義をする機会に恵まれ、私が母校の大阪大学に勤めるようになってからも、「消費者保護法」、「法情報学」の非常勤講師を継続することになったため、本学とは、20年以上のお付き合いが続いている。

本学に赴任してからは、専門の民法を担当する傍ら、法整備支援のために、モンゴル、中国、ヴェトナム、カンボジア、ラオス、ウズベキスタンで民法の講義をする機会に恵まれた。それまでは、私の比較研究の対象は、ドイツ民法、フランス民法、英米法等の先進国に限定されていた。しかし、法整備支援事業に携わることを通じて、アジア諸国の民法にじ

かに触れることができたことは、私の研究の視野を大いに広げただけでなく、留学生の指導をする上で何が大切かを考える上でも非常に有益であった。

2005年に明治学院大学の法科大学院に移籍してからも、名古屋大学大学院法学研究科の非常勤講師として、留学生を対象とした比較法研究(契約法、不法行為法)の講義を担当したり、名古屋大学の留学生の指導を継続して学位(法学博士)を取得させたりすることができているのも、法整備支援事業に参画してきた経験が活かされているからだと思っている。





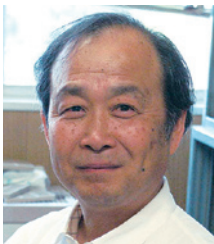
## 名古屋大学名誉教授として

上村 大輔 大学院理学研究科教授

平成20年5月1日、名古屋大学名誉教授第953号の称号を賜りました。名古屋大学にて教育を受け、10年余教鞭をとらせて頂いたことは何にも代え難い光栄です。この称号を手にし、名誉教授諸先輩方を想うに、歴史の重さと責務の大きさを痛感する次第です。

私は故平田義正名誉教授の下、名古屋大学助手を6年間させていただいた後、18年間静岡大学で助教授、教授時代を経て名古屋大学に赴任致しました。考えてみますと、理学部に入学した時から平田先生のフグ毒研究に憧れたものです。当時の平田研究室では中西香爾氏（2007年文化勲章）、故後藤俊夫氏、岸義人氏（1999年 恩賜賞・日本学士院賞）らが活躍されており、学生間でも評判になっていました。その研究室で、頭でっかちになりながらも次第に天然物化学の中心と

して頑張れるようになりました。昭和43年に野依良治氏が化学教室に加われ、その時の鮮烈な印象を忘れられません。大学にとり学問を守り伝承することは大切ですが、将来に向け学問を切り開くことも重要です。名古屋大学の責務は後者にあると思います。何が新しく、何が必要かはその時代の大学の見識となります。理念に裏打ちされた施策が期待されており、実現できるのが名古屋大学であると思っています。研ぎすまされた人類の明るい未来像構築こそが今将に大学に付託されているのではないのでしょうか。名古屋大学の益々の発展を予感しつつ、名誉教授として一層の研鑽に励むことをお誓いいたします。



## 現役でも名誉教授？

田邊 哲朗 大学院工学研究科教授

私は現在60歳、現役（九大教授）の名誉教授です。新しい名誉教授授与システムのおかげで、10年間名大に奉職させていただいた故に、名誉教授にさせていただきました。大変有り難いことです。すでに名大を退いておりますので、大きな貢献ができず大変申し訳ないとも思っています。というわけで、振り返りみてというのはそぐいません。そこで、たまに思う退職後のことについて綴ってみました。若い間は、定年がきたらスパッと辞めて、過去のしがらみを断ち、華麗なる転身（職）ができればいいなと夢見ていました。実際、世の中にはカッコ良く転身して、小説家や陶芸家等になれる人がいて、羨望の眼差しで見えていたものです。自分にはそのような能力がない事が分かるような歳？になりましたので、華麗なる転身は諦めざるを得ません。最近、特任教授として、

定年後もそれまでの蓄積あるいは、全く違った能力を遺憾なく発揮されている先生方が多数いらっしゃいます。人口が減り、年金も減っていますから、すぐに年金生活というわけにもいきません。とはいえ、自分の能力と、地位がもたらす自分の能力以外のものとを区別することは容易ではないので、役立たせてもらえるかどうか、あるいは煙たがられないだろうかと気にはなります。幸いあと3年、現役（九大での定年退職は64歳）です。退職のことは気にせず、今を生きることと専念させていただきます。結果として名大のお役にたてれば望外の幸せです。



## 道草ばかりの38年

浪川 幸彦 大学院多元数理科学研究科教授

1年早く辞め「定年退職される教授のこぼ」を書かずに済んだはずだったが、本欄に寄稿せよとのこと。結局事実上逃れられなかった。

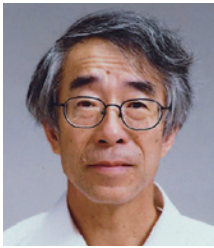
振り返ると38年間も本学にお世話になっていたことになる。助手として赴任した1970年は大阪万博のあった年で、日本は高度成長の真最中であつた。しかし当時の名古屋大学はまだのどかで、豊田講堂前のグリーンベルトが広々と続き、ヒバリが鳴きながら中空で輪を描いていた風景を今も鮮やかに思い出す。

爾来、今では考えられない程の長期海外滞在、あるいは専門外の音楽やドイツ語の講義担当など、本学の自由な学風を最大限享受させていただき、実に幸せな学生生活であつた。

生来好奇心は人一倍強いが怠け者で、本業そっこのけで道

草ばかりしてきた。その「成果」が専門外の「マタイ受難曲」などの講義である。この春当時の受講生の一人に何年かぶりで出会った。彼女は「音楽に進むか専門（理学）に進むか迷って後者を選んだが、まだ迷いが残っていた。しかしあの講義を聴いて、その選択でよかったと吹っ切れた」と言ってくれた。その言葉に、こんな道草人生にもなにがしかの存在意義があつたと知って私自身ひとつ吹っ切れるものがあつた。

4月からは数学教員養成に携わる。これも寄り道がいつか本道になったようなものだ。今までの道草で「培った」ものをせいぜい活かすべく努めたい。そしてなお本学にもなにがしかをお返しできればと願っている。



## 謝辞と希望

中井 正喜 大学院国際言語文化研究科教授

私は今年（2008年）3月に、退職いたしました。名古屋大学から名誉教授を授与いただき、深く感謝申し上げます。日頃お世話いただきました同僚の先生方、事務の方々に厚くお礼申し上げます。

私は学生時代からずいぶん長く名古屋大学にいましたので、自分の研究室をかたづけ終わったときには、胸の詰まる思いがしました。しかし長くいたわりに、貢献の少ない点は慚愧するほかありません。

私は中国の現代文学を、特に1920年代の作家・作品について勉強してきました。私はそうした勉強が好きである以外に、取り柄がありませんでした。今は体力・気力をだんだん失いつつありますが、しかし頭がぼけないうちは（現在でも自覚がないだけかもしれません）、なんとか1930年代の魯迅、

茅盾等を勉強し続けたいと念願しています。

私は自分の父親の世代と違い、戦争に徴集されることもありませんでした。学生時代の大学の学費も、年間1万2千円だったと思います。戦後の新憲法の下に、第9条の下に、育ち勉強できたことを幸せと思っています。

欧米諸国との友好関係は言うまでもないことですが、今後、日本とアジア諸国との友好関係の中で、名古屋大学の研究・教育・経営がさらに発展いたしますことを祈念いたします。



## 名古屋大学での年月を振り返って

八田 武志 大学院環境学研究科教授

名古屋大学には14年間お世話になりました。教養部が改組され名古屋大学に9番目の学部が新しく開設されるのに併せての配置換でした。新学部ということでしたが、建物は以前の大学とさほど変わらない、実験室も不十分な老朽校舎で、淡い期待は瞬時に潰れたことを記憶しています。今年度中には私の研究室があった棟も改修工事が行われますが、国立大学に27歳で職を得て以来、きれいな研究室や十分な設備や広さのある実験室とは縁のない研究者生活であったと懐古しています。しかし、皮肉ではなく、貧しい環境で工夫しながら実験研究をする楽しさを味わうことが出来ました。

名古屋大学では他学部の研究者との共同研究活動に取り組むという、総合大学に配置換されたメリットを活用した研究者生活を送ることも出来ました。また、2度の改組を経験し

ましたが、情報文化学部と環境学研究科と一貫して文理融合型の組織に属し、様々な学問分野の世界的な頭脳と時間を共有できた僥倖は何物にも代え難い体験であったと、名古屋大学での年月を振り返って感謝しています。

文理融合型の研究・教育組織が他の大学に比べて多いことは名古屋大学の大きな特色であり、この特徴を存分に生かすことで世界に冠たる大学へと発展することを期待し、いただいた称号に相応しい応援をと考えています。



## 名誉教授の称号を饒（はなむけ）として

林 上 大学院環境学研究科教授

第971号、これがこのたび名古屋大学から私に授けられた名誉教授称号の通し番号です。授与式の会場で平野総長から名前とともにこの番号を呼ばれたとき、私のまえに970名もの諸先輩がこの栄誉に浴され、そして今日、自分もその中に加わるのかと思うと、なにやら感慨深い思いにとらわれました。私は27年間、名古屋大学で教育・研究に勤しむことができました。名誉教授の称号授与資格の年齢制限をころうじてクリアしての授与でしたので、いささか気が引ける気がしないでもありません。実際、授与式のあとに行われた名誉教授懇談会のパーティでは、高名な諸先輩に交じり「新参者」としてどこにいればよいのか一瞬、戸惑いました。

名誉教授称号の証書は卒業証書のようなでもあります。学生諸君は卒業証書を胸に社会へ向けて飛び出していきます。私

の場合は、別の職場でさらに教育・研究に携わることになりました。学生諸君が大学で学んだことを財産に社会で活躍するように、私も名古屋大学での経験を新たな職場で生かしたいと考えております。十二分とまではいえませんが、為すべきことは為したという充実した思いで名古屋大学を去ることができました。去ったとはいえ、忘れがたい思いを胸に、新たな世界での飛躍を期待する、そのような臚（はなむけ）にも似た効用が、第971番目の名誉教授称号の証書にはあるような気がしております。長い間お世話になり、ありがとうございました。

# 環境安全衛生業務を向上させるために全国の大学と情報交換する —大学等環境安全協議会—

大学等環境安全協議会（以下「大環協」という）は、1979年（昭和54年）に大学の実験廃液を処理する部門と文部省（現文部科学省）との「大学における廃棄物の適切な処理」についての意見交換・連絡会を目的として発足しました。表1に大学等環境安全協議会沿革を示します。その後、組織の役割変化と共に、名称変更をしながら現在に至っております。現在は、教育、研究、学生・教職員の活動、医療等の諸活動に伴って使用・排出される化学物質等の管理、有害な廃棄物の処理、環境安全教育・安全衛生管理業務等に携わる教職員のレベル向上などの活動を行っている組織です。会員数は、名誉会員16名、団体会員99団体、個人会員111名、賛助会員47企業（2007年6月現在）です。

**表1 大学等環境安全協議会沿革**

1979年	「国立大学廃液処理施設連絡会」発足
1982年	「国立大学廃棄物処理施設協議会」に改称（会員制に移行）
1983年	「大学等廃棄物処理施設協議会」に改称（公私立大学の参加を要請）
2001年	「大学等環境安全協議会」に改称（廃液・廃棄物処理のみならず、大学内での環境管理業務も実施）

名古屋大学では、この組織に設立初期より参加し、国内の大学等で行われている有効な活動について情報収集するだけでなく、名古屋大学の環境安全衛生業務や方法について、積極的に情報を発信して参りました。これまで名古屋大学が報告した内容は、

- ①「名古屋大学内の紙ごみリサイクルシステムの構築（学内トイレトーパー100%供給）」
- ②「実験系廃棄物（有機物質、無機物質、写真廃液）における処理業者選定システム構築による処理費の大幅削減」
- ③「排水槽のpH連続モニタリングシステムの構築」
- ④「排水槽の自主点検方法」
- ⑤「名古屋大学における独立法人化に向けた環境安全対応」
- ⑥「環境報告書の作成方法・あり方」
- ⑦「化学物質管理システムを利用した化学物質の一括管理」などです。この結果、全国の大学から調査や訪問を多くいただいております。また、これらの活動が認められ、表2のように名古屋大学の多くの教職員が大環協から表彰されております。

**表2 大学等環境安全協議会から表彰された教職員**

年度	氏名・職名	所属部局	賞
平成2年度	小森均平 技官	省資源エネルギー研究センター	技術賞
平成17年度	浅井勝一 助手	廃棄物処理施設	功労賞
平成18年度	原口紘丞 教授	工学研究科	協議会賞
平成19年度	松浪有高 技術職員	全学技術センター	技術賞

大環協の2008年の活動として、第24回技術分科会が7月24-25日に茨城県民文化センターホール（共催：茨城大学）にて開催されます。また、第26回総会・研修会が11月13-14日に琉球新報ホール（共催：琉球大学）にて開催されます。内容は「労働安全衛生法に伴う安全衛生または環境保全活動」、「環境報告書・環境会計」、「化学物質の管理」、「環境安全教育」などについての講演、パネルディスカッションです。詳細なプログラムは今後更新されますので、詳しくはホームページ <http://www.daikankyo.esc.u-tokyo.ac.jp/index.html> をご覧ください。

2008年度、名古屋大学は大環協の運営に理事として参画し、化学物質管理、労働安全衛生マネジメント、大環協と文部科学省とで取り組んでいる環境エネルギーマネジメント（省電力、省エネルギー、環境報告書等）、大学の社会的責任（遵法、リスク・コミュニケーション、情報開示、社会貢献等）について取り組んでおります。

名古屋大学内の環境安全衛生業務の情報収集・意見を集約することは、環境安全衛生管理室だけでは対応できないことも多く、そのため大学事務本部の施設管理部などと協力して進めております。また、化学物質のマネジメント、安全衛生マネジメント等の活動は、構成員、技術職員からの協力を頂きながら行う必要もあります。今後も、より一層、名古屋大学の構成員の皆様方のご協力を賜りますようお願いいたします。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
1 高木新・理学研究科准教授らのグループは、線虫の研究から細胞形状の変化に関するセマフォリンが、たんぱく質合成を促進することを解明	4.16 (水)	日刊工業
2 視点：後 房雄・法学研究科教授 イタリア有権者、右派に改革託し政界再編	4.16 (水)	朝日 (朝刊)
3 名古屋駅ロータリークラブが椿賞贈呈式挙行 坂本純一・医学系研究科教授を表彰	4.17 (木) 4.25 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
4 名古屋大学ライフトピア講演会「年を重ねるといふこと～その豊かさ、その幸せ～ 第二回」27日開催：大西丈二・医学部准教授 「健康で豊かな社会を考える / 街でつくる老年学という新しい学問」	4.17 (木)	朝日 (朝刊)
5 本学とフランス・リール工科大学が共同で、電子から整列したシンクロトロン光を発生させることに成功	4.18 (金)	日刊工業
6 エコトピア科学研究所 エネルギーシステム (中部電力) 寄附研究部門 (第4期) 創設記念シンポジウム～持続的発展社会に向けた電気エネルギーシステムの革新～17日開催	4.18 (金)	中日 (朝刊)
7 パーキンソン病講演会 5月10日開催：平山正昭・医学部附属病院講師	4.18 (金)	中日 (朝刊)
8 朝日カルチャーセンター：樋口敬二・本学名誉教授 「ヒマラヤの氷河を語る」	4.18 (金) 5.10 (土)	朝日 (朝刊)
9 「あいち平和映画祭2008」26日開催：映画研究会が自主制作した作品を同時上映	4.18 (金) 4.23 (水)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
10 森 郁恵・理学研究科教授 線虫の「感じる」を研究	4.19 (土) 4.24 (木)	朝日 (朝刊) 日刊工業
11 紙つづて：福井康雄・理学研究科教授 月によせて	4.19 (土)	中日 (夕刊)
12 土曜訪問：静岡県立美術館長・宮治昭・本学名誉教授 パーミヤンは私の出発点	4.19 (土)	中日 (夕刊)
13 中日文化センターだより：齋藤夏来・附属図書館研究開発室特任准教授 「五山官寺制度と尾張・三河」	4.20 (日)	中日 (朝刊)
14 あしなが学生募金19日から：父親を肺がんで亡くした宮本尚一郎さん・本学学生は、「親を亡くした子にもチャンスを与えて欲しい」と訴える	4.20 (日)	中日 (朝刊)
15 附属図書館 2008年春季特別展 「濃尾の医術 一尾張藩奥医師 野間家文書を中心に」 5月2日まで開催	4.21 (月)	中日 (朝刊)
16 文部科学省は「再生医療の実現化プロジェクト」の幹細胞治療開発領域で、本学の「iPS細胞由来血管前駆細胞を用いた新規血管再生医療の展開研究」を選定	4.21 (月)	日刊工業
17 環境フォーラム・ヒマラヤ写真展 「若者よ、地球を歩け～ヒマラヤ氷河が発信する明日へのメッセージ～」 20日開催：藤田耕史・環境学研究科准教授 「今、ヒマラヤで起きていること」、上田豊・本学名誉教授 「地球を歩こう」	4.21 (月)	朝日 (朝刊)
18 豊田講堂がトヨタとグループ企業の寄付で改修実現 工事を終え、かつての美しい外観を取り戻す	4.21 (月)	日経 (夕刊)
19 中世史研究会例会25日開催：飯田良一さん・本学大学院生が、「室町期伊勢神宮における公武の祈禱－義持期から義政期を中心として」と題して報告	4.21 (月)	中日 (夕刊)
20 本学は文部科学省が2008年度にスタートさせた、「産学官連携戦略展開事業」の「国際的な産学官連携活動の推進」に応募	4.22 (火)	日刊工業
21 大学婦人協会愛知支部総会記念講演「男女共同参画が達成したもの、未達成のもの－個人的経験を踏まえて」27日南山大学で開催：講師は田村哲樹・法学研究科准教授	4.22 (火)	中日 (朝刊)
22 故武澤純・医学系研究科教授の医学部葬 5月10日：葬儀委員長は濱口道成・医学系研究科教授	4.22 (火)	中日 (朝刊)
23 名古屋歴史科学研究会例会26日開催	4.22 (火)	中日 (夕刊)
24 増子記念病院 ますこ健康開発センター健康講座 5月1日～6月下旬開催：島岡清・総合保健体育科学センター教授	4.23 (水)	中日 (朝刊)
25 叙位叙勲：正四位 荒川泰二・本学名誉教授	4.23 (水)	中日 (朝刊) 読売
26 東山動物園「世界のメダカ館」飼育係・田中理映子さん・本学卒業生が、メダカの骨格標本作りに挑戦	4.23 (水)	中日 (朝刊)
27 大屋雄裕・法学研究科准教授に、「靖国」上映問題や「学校裏サイト」で問われている『表現の自由』を聞く	4.23 (水)	朝日 (夕刊)
28 近世史研究会 4月例会29日開催	4.23 (水) 4.24 (木)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
29 金刀比羅宮 書院の美：伊藤大輔・文学研究科准教授 「柳の間」を飾る「水辺柳樹白鷺図」	4.24 (木)	朝日 (朝刊)
30 本学は豊田市と市内の企業が進める外国人労働者への日本語教育に協力	4.24 (木)	中日 (朝刊)
31 「2008年度がんを生き抜くライフトピアスクール」5月25日開講 講座は7月、11月、来年3月の計4回開催	4.24 (木) 5.13 (火)	中日 (朝刊) 日経 (夕刊)
32 本学など中部の産学官が連携し、航空機産業への参入を支援する組織「航空宇宙産業フォーラム」を設置	4.25 (金)	中日 (朝刊) 他3社
33 ～環境技術をリードする東海・北陸～：林 良嗣・環境学研究科長 「質の良い鉄道網整備を」	4.25 (金)	日刊工業
34 活発化する環境技術の研究・開発：情報文化学部では、日本環境取引機構 (JCTX) の中部支部と連携し、大学生と社会人がチームを作り排出権取引の演習を実施	4.25 (金)	日刊工業
35 学ぶ磨く 中日文化センター訪問：高橋亨・文学研究科教授 「宇治大君・中の君をめぐる端役たち－女房と僧を中心に」	4.25 (金)	中日 (朝刊)



本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
36 「福井康雄展」29日開催	4.25 (金)	中日 (朝刊)
37 本学は米カルフォルニア大学ロサンゼルス校、シカゴ大学の2大学と学術交流協定を締結 平野眞一総長は、「交流で本学の知名度向上や教育・研究の充実につながることを期待できる」と話す	4.26 (土)	読売
38 名古屋大学・東北大学・京都教育大学 マンドリン春の合同演奏会 5月4日開催	4.26 (土)	中日 (朝刊)
39 紙つづて：福井康雄・理学研究科教授 ウィーンの子供たち	4.26 (土)	中日 (夕刊)
40 100 Answers：「国民の休日」を自由に変えられるとしたら、どうしますか？ 坪井秀人・文学研究科教授は「自分や家族、友人の誕生日を勤務先で祝日に」と話す	4.27 (日)	朝日 (朝刊)
41 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 国益と普遍のはざままで	4.27 (日)	中日 (朝刊)
42 「人・地域の絆～ひとつくりを考える」27日開催：平野眞一総長が吉良町花岳寺にて講演	4.28 (月) 5.10 (土)	中日 (朝刊)
43 春の褒章：「紫綬」磯部稔・本学名誉教授	4.28 (月)	朝日 (朝刊) 他5社
44 本学は、気象庁気象研究所や福岡大学と共同で黄砂の観測を開始	4.28 (月)	日経 (朝刊)
45 文部科学省の08年度科学研究費補助金速報 本学の採択件数は530件 172,790万円	4.28 (月)	日刊工業
46 敦賀原子力発電所直下に活断層が認定されたことを受け、鈴木康弘・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授と渡辺満久・東洋大学教授が原発敷地内を視察	4.28 (月)	中日 (朝刊)
47 ガソリン税の暫定税率復活が争点となった、衆議院山口2区補欠選挙で政府・与党は大敗 後 房雄・法学研究科教授は、「福田政権に対する審判。なぜ解散総選挙をやらないのかという声が強くなるだろう」と話す	4.28 (月)	中日 (朝刊)
48 春の叙勲：瑞宝中綬章 鶴高重三、江藤恭二、鬼頭幸生・本学名誉教授、瑞宝単光章 手塚昶子・元医学部附属病院看護部看護師長	4.29 (火)	中日 (朝刊) 他4社
49 あたらしい憲法のはなし：愛敬浩二・法学研究科教授 9条を政策として問え	4.29 (火)	朝日 (朝刊)
50 健康東海プラザ 特集・医療相談：高井佳子・医学部附属病院講師 目の前の映像が2つに見える	4.29 (火)	読売
51 五島剛太・高等研究院特任准教授のグループが、動物の細胞分裂に必要な未知のタンパク質を発見 「オーグミン」と名付ける	4.30 (水)	中日 (朝刊)
52 マイナス80：竹内恒夫・環境学研究科教授 気候政策 3	4.30 (水)	中日 (朝刊)
53 第2回公立病院等地域医療連携のための有識者会議30日開催	5. 1 (木)	中日 (朝刊)
54 日本植物生理学会 (会長・中村研三・生命農学研究科教授) 企画・監修の「植物まるかじり叢書」全5巻完結	5. 2 (金)	朝日 (朝刊)
55 国立長寿医療センター総長・大島伸一・元医学部附属病院院長が、第61回中日文化賞を受賞	5. 3 (土)	中日 (朝刊)
56 西尾市岩瀬文庫100周年記念式典6日開催：「日本の文庫に秘められた使命と魅力」コーディネーターは塩村耕・文学研究科教授	5. 3 (土)	読売
57 核心：航空自衛隊のイラクでの空輸活動について、違憲とした名古屋高等裁判所の司法判断を政府は無視する構え 本 秀紀・愛敬浩二・両法学研究科教授は、「政府が『傍論』として無視するのはおかしい」と話す	5. 4 (日)	中日 (朝刊)
58 「憲法フェスティバル2008 in あいち」3日開催：森 英樹・本学名誉教授	5. 4 (日)	中日 (朝刊)
59 マイナス80：竹内恒夫・環境学研究科教授 気候政策 4、5、6	5. 4 (日) 5. 5 (月) 5. 6 (火)	中日 (朝刊)
60 第1回地球教室「河原の石で包丁をつくろう」5月31日～6月1日開催	5. 5 (月) 5.14 (水)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
61 学生街ダンス：ゾウのふんを研究し卒業論文にまとめた武田梓さん・本学大学院生	5. 6 (火)	中日 (朝刊)
62 老年学：愛知淑徳大学教授・井口昭久・本学名誉教授 久しぶりの自転車	5. 8 (木)	朝日 (朝刊)
63 内山剛・工学研究科、中山晋介・医学系研究科准教授らは、生体細胞を傷つけずに計測できる小型磁気センサーを開発	5. 9 (金)	日刊工業
64 4月の地震：林 能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教 豊田市で最大震度3観測	5. 9 (金)	読売
65 訃報：伏見康治・本学名誉教授	5. 9 (金) 5.10 (土) 5.12 (月)	中日 (夕刊) 中日 (朝刊) 他3社 日刊工業
66 鈴木康弘・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授ら専門家3人のグループは、敦賀原子力発電所の立地を見直すべきだとの研究成果をまとめる	5.10 (土)	中日 (朝刊)
67 朝日カルチャーセンター：山本直人・文学研究科教授 「北陸・縄文の旅」	5.10 (土)	朝日 (朝刊)
68 紙つづて：福井康雄・理学研究科教授 母と戦争	5.10 (土)	中日 (夕刊)
69 中部を彩る：ピアカウンセラー・坂野尚美さん・本学大学院生 患者目線で悩み分かつ	5.10 (土)	日経 (夕刊)
70 書籍：「日本植民地建築論」西澤泰彦・環境学研究科准教授著	5.11 (日)	朝日 (朝刊)
71 中日新聞 高血圧セミナー 「ウデをまくろう、東海！」10日開催：奥村健二・医学部教授	5.11 (日)	中日 (朝刊)

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
72 禁煙市民フォーラムーそろそろ禁煙してみませんか？知って得する最新情報6月1日開催：久米裕昭・医学系研究科講師	5.11 (日)	朝日 (朝刊)
73 病を抱えた子どもたち 社会全体で見守る：奈良間美保・医学部 (保健学科) 教授	5.12 (月)	読売
74 本学は2005年12月から「名大の授業」と題し、インターネットを活用して1分間の動画による授業を公開	5.12 (月)	朝日 (朝刊)
75 食の健康学：医学系研究科・公衆衛生学のグループが「早食い」を調査 男女とも食べるのが早い人ほど“太め”という傾向が浮かび上がる	5.12 (月)	朝日 (夕刊)
76 研究室発：小林敬幸・エコトピア科学研究所准教授 熱の有効利用で省エネ	5.13 (火)	中日 (朝刊)
77 「難加工技術展2008」 14～17日開催：工学研究科機械理工学専攻機械科学分野超精密工学研究グループが参加	5.13 (火)	日刊工業
78 大学：西野節男・教育発達科学研究科教授は、「イスラム社会と非イスラム社会の対話の可能性を考えると、独自の発展過程をたどってきたインドネシアのイスラム教育が、これからの世界で重要な役割を担うだろう」と話す	5.13 (火)	朝日 (朝刊)
79 外国人が話す日本語サロン「豊かな食文化ー香港」17日開催：葉 詠嘉さん・本学日本語・日本文化研修生	5.13 (火)	中日 (朝刊)
80 学生街ダンス：鈴木まり子さん・本学学生 困っている人に手を	5.13 (火)	中日 (朝刊)
81 中国・四川大地震 山中佳子・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター准教授は、阪神大震災の20倍の規模と解析 また同センターによる地震波の解析では、エネルギーは阪神大震災の30倍と判明	5.13 (火) 5.14 (水) 5.15 (木)	朝日 (夕刊) 中日 (朝刊)
82 博物館第82回特別講演会「地質学と歴史・考古学との出会い」17日開催	5.14 (水)	中日 (朝刊)
83 地球科学や生態科学の総合的な研究組織「地球生命圏研究機構」を設置	5.14 (水)	日刊工業
84 神山勉・理学研究科教授と村上緑・同研究科助教らのグループが、スルメイカの目の刺激伝達にかかわるたんぱく質の立体構造を解明	5.15 (木)	中日 (朝刊) 日刊工業
85 「エコアクセスフル・シンポジウムー中部の環境と交通を考える」6月11日開催：森川高行・環境学研究科教授「エコ通勤とは」	5.15 (木)	中日 (朝刊)
86 中国・四川大地震 日本国内で「長周期地震動」を観測 福和伸夫・環境学研究科教授は、「濃尾平野は長周期地震動で揺れやすい地下構造になっている。2003年の十勝沖地震以降に注目された長周期地震動対策は、古くて新しい大きな問題。超高層ビルだけでなく、石油タンクなどでも注意が必要」と話す	5.15 (木)	中日 (夕刊)
87 昨年12月、竹内恒夫・環境学研究科教授と研究室のメンバーが、実験的に放置自転車の無料貸し出しを実施 13日間で1400人が利用 駐輪場を十分確保できれば、乗り捨てなどを減らす効果が期待できるという	5.15 (木)	日経 (夕刊)
88 斎宮歴史博物館企画展「源氏物語と三重」記念講演会25日開催：高橋亨・文学研究科教授「源氏と後宮文化」	5.15 (木)	朝日 (夕刊)

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容	
<b>5月30日(金)～7月26日(土)</b> 場 所：博物館展示室 時 間：10:00～16:00 休 館 日：日・月曜日 入場無料	<b>第10回博物館特別展</b> <b>「今に生きる、からくり人形</b> <b>～ものづくりの源流と尾張文化の継承～」</b>	
[問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767		
<b>6月21日(土)</b> 場 所：野依記念学術交流館 カンファレンスホール 時 間：13:30～16:00 (開場12:30) 定 員：200名 (当日先着順) 入場無料	<b>第15回理学懇話会</b> テー マ：「地球温暖化に挑む」 講演題目：「地球温暖化でアジアの気候はどうなる？」 講 演 者：安成哲三 (地球水循環研究センター教授) 講演題目：「地球温暖化問題をどうとらえるか？」 —2050年の担い手たちへ— 講 演 者：高野雅夫 (環境学研究科准教授)	
[問い合わせ先] 理学部・理学研究科広報委員会 052-789-2394 kouhou@sci.nagoya-u.ac.jp		

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**6月21日(土)**

場 所：16:00～17:30  
会 費：300円  
当日参加可

## 高校生のためのサイエンスカフェ in 名大

理学懇話会終了後、高校生を対象に、地球温暖化問題に取り組む研究者を囲んで、当日の講演や科学についてあれこれとおしゃべりするサイエンスカフェを開きます。

[問い合わせ先]

理学部・理学研究科広報委員会  
052-789-2394  
kouhou@sci.nagoya-u.ac.jp

**6月28日(土)**

場 所：生命農学研究科附属農場内  
農業館  
時 間：14:00～16:00  
定 員：60名  
参加無料

## 生命農学研究科附属農場講演会

テ ー マ：「農業と環境」  
講演題目：「作物を病気から護る」  
講 師：拓植尚志（生命農学研究科教授）

[問い合わせ先]

附属農場事務掛 0561-37-0210

**7月1日(火)**

場 所：博物館講義室（講演会）  
時 間：15:00～16:00  
入場無料

## 第84回博物館特別講演会

講演題目：「名古屋大学ロボット研究の最前線」  
講 演 者：福田敏男（工学研究科教授）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**7月5日(土)**

場 所：博物館展示室  
時 間：11:00～及び14:00～  
入場無料

## 第10回博物館特別展

「今に生きる、からくり人形 ～ものづくりの源流と尾張文化の継承～」

からくりの実演（茶運び人形、弓曳童子）  
実 演 者：九代玉屋庄兵衛

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**7月12日(土)**

場 所：豊田講堂  
時 間：13:00～17:00  
入場無料

## 名古屋大学レクチャー 2008

講 演 者：飯島澄男（特別招へい教授）、  
Sir Harold Walter Kroto（The Florida State University 教授、  
1996年ノーベル化学賞受賞者）

[問い合わせ先]

研究協力部研究支援課高等研究院事務室  
052-788-6051、6153



名大トピックス No.181 平成20年6月16日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

リトルワールド（犬山市）・  
ペルー館での演奏  
（フォルクローレ同好会）  
（平成20年5月25日）



## 74 豊田佐吉翁肖像画

2008(平成20)年2月2日(土)、1960(昭和35)年の竣工以来、およそ半世紀にわたって本学のシンボルとして親しまれてきた豊田講堂が約1年におよぶ大規模な改修・増築工事を受け、その竣工を記念する豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイが開催されたことが本誌NO.178に取り上げられています。

例年、大学文書資料室は、ホームカミングデイにおいて本学の歴史に関する企画展示を開催していますが、この竣工記念ホームカミングデイでは「豊田講堂のあゆみ」展を開催しました。この展示は、改修工事を2ヶ月後に控えた2006(平成18)年9月に開催された第2回ホームカミングデイで行われた企画展示を再現したのですが、今回はこれまで未公開であった豊田佐吉翁肖像画(写真1)を展示しました。

この佐吉翁肖像画は、キャンパス裏面などの記録から、1959(昭和34)年5月に株式会社豊田自動織機製作所(現株

式会社豊田自動織機)から本学に寄贈されたものであり、作者のイニシャルがJ.H.であることがわかっていますが、寄贈された経緯などの詳細は明らかではありません。1959(昭和34)年3月下旬、トヨタ自動車工業株式会社から建設寄付される講堂の名称を「豊田講堂」とすることが確定し、それをうけて制作された肖像画が着工直後の5月に寄贈されたものと思われます。

本学に寄贈されて約60年を経た肖像画は、絵の具の状態も良好であり、全体的なクリーニングを行った上で新調した額に収めて展示公開されました。竣工記念ホームカミングデイ当日には、本学の全学同窓会会長である豊田章一郎トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長も佐吉翁肖像画を見学されました(写真2)。

今後、この豊田佐吉翁肖像画は豊田講堂内のしかるべき場所に掲げられることになっています。



- |   |   |                                |
|---|---|--------------------------------|
| 1 | 2 | 1 新しく額装された豊田佐吉翁肖像画(油彩、F15号)    |
|   | 3 | 2 ホームカミングデイで佐吉翁肖像画を見学する豊田章一郎会長 |
|   |   | 3 クリーニング作業前の肖像画                |